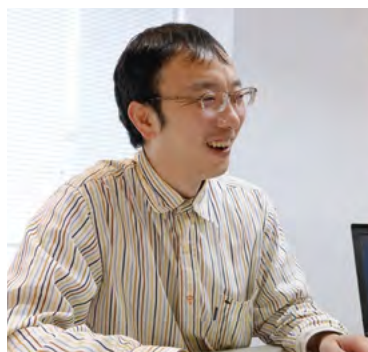




神経細胞のつながりから 脳の性差に挑む

理化学研究所 生命機能科学研究センター
比較コネクティクス研究チーム
チームリーダー

宮道 和成
Kazunari Miyamichi



Q 研究テーマを一言でいうと?

A 社会行動をつかさどる神経回路の構造の解明

哺乳動物のさまざまな行動をつかさどる脳の視床下部にある神経細胞について、マウスを用いて研究しています。具体的には、マウスがある行動をした時に働く複数の神経細胞同士が、どのようにつながっているのか、その接続パターンを網羅的に解析しています。これは、神経細胞の回路を明らかにするテーマです。特に神経細胞の接続パターンに雌雄で違いがあるのか、雌が妊娠中や出産する時にこのパターンがどのように変化するかについて興味を持っています。

まだ始まったばかりですが、こうした研究を通じて脳の実態に迫っていきたいです。さらに、研究対象をマウス以外の哺乳動物に広げるための環境作りにも取り組んでいます。



Q 現在の研究テーマに取り組んだきっかけは?

A 著名人を題材にした本との出会いと自身のライフイベント

子供の頃は特に生物が好きだったわけではなく、インドア派で日がな一日、本を読んでいるのが好きでした。高校生の時にノーベル生理学・医学賞を受賞した利根川進先生たち取材した立花隆さんの本を読んで、研究者になりたいと思いました。それから大学に進学し、これまでは、特定のフェロモン(匂いの一種)を処理する際に、脳で働く部分が雌雄によって違うのかを探ってきました。今までも性差に関わる研究をしてきましたが、雌の妊娠や出産に関わる神経細胞の接続パターンに焦点を当てて研究しようと決めたのは、妻の妊娠、出産がきっかけの1つだと思います。何でも研究対象として見てしまうのは研究者の癖ですね。



Q 研究室を立ち上げて変わったことは?

A 夫婦で研究と育児に奮闘する毎日

今年4月から神戸の理化学研究所に移りました。妻も研究者なので、共に研究に励みつつ、協力して2人の子供を育てています。自分の研究室を立ち上げることになって不安だったのは、妻の仕事でした。夫婦同時に同じ機関のポジションを確保することは難しいからです。そこでジョイントオファーをお願いしました。研究者の赴任に際して配偶者のポジションも用意してもらえる制度です。アメリカでは一般的ですが、日本ではあまり浸透していません。研究場所が変わっても夫婦で安心して研究を続けられる制度を整えてほしいと思います。

研究を進めていく中でぶつかる問題は、乗り越えたり迂回したりできることが多いものです。大望を持ち、自分の才能を信じて取り組むことが大切だと思っています。